

青年期の家族サブシステム(母子・父子・両親間)と自我同一性の関連

—Family System Test を用いた検討—

丸山明子^注・奇恵英

The Relation Between Family Sub-system (mother-child / father-child / husband-wife) and Identity in Adolescence Examined by Family System Test

Akiko Maruyama · Hyeyoung Ki

1. 問題と目的

青年期における重要な発達課題として、Erikson (1973) が提唱する自我同一性の獲得があげられる。これは、これまでの自分自身を振り返り、新たな自己像を再構築する時期のことを指すが、この時期に自分自身がどういう人間であるのかをうまく見出すことができず、自我同一性拡散状態に陥り、不適応になる青年も少なくない。

このような青年期の発達課題における不適応問題や影響を及ぼす要因については様々な研究がなされており、青年自身の特性や認知などの内的な要因、友人関係、親子関係などの外的な要因との関連が示されているが、その中でも青年が今まで依存し、育ってきた家族からの精神的自立は、青年自身、また家族にとっても大きな課題となるため特に重要であると考えられている。

亀口 (1992) は、青年期の子どもがいる家族システムについて、①子どもたちの親離れ、親たちの子離れの段階、②夫婦関係の葛藤や社会的問題への対処の段階、③祖父母との関わりにおける問題の段階、の3つの発達段階を示している。その中で、①の発達課題を主要な課題として取り上げ、子どもが親離れをしていくためには、子どもが外界と家族を自由に出入りできる家族システムの柔軟性や、子どもの依存を受け入れながらも、程よく距離を保ちながら子どもの自立を促すことが大切であると述べている。

Gehring ら (1988) が行なった青年期の家族システムの研究においては、青年期の子どもを持つ問題のない家族は、両親の関係が親子関係より親密で、親は子より強い影響力を持ち、世代間の境界がはっきりしていることが示されている。

また、White ら (1983) は青年期から初期成人までの親子関係の発達過程を、①個性化の段階、②個性化に関係の視点が加わる段階、③個性化に両親の視点が加わる

段階、④個性化に相互的な視点が加わる段階、⑤相互性の始まりあるいは実用段階、⑥完全に仲間のような相互性の段階、の6つに分類している。すなわち、まず青年の自己意識が芽生え安定しながら、両親の意見を取り入れるようになるにしたがって、徐々に自分と両親のそれぞれは一人一人の個人であるという認識を持つに至り、互いに個別の人間としての仲間のような関係に発展することを示している。

このように、青年が家族からの精神的自立を図るためには、今まで密着していた両親と自分の関係から程よい距離を保ちつつ、親を個人として認識し、個人対個人として付き合いしていくが必要になるのである。

ところで、日本における、青年期の子どもを持つ家族システムにおいては、White ら (1983) や Gehring ら (1988) のような親と子の境界線がはっきりと分れにくく、青年期後期になっても親に依存する関係を望んでいることが示されている (落合・佐藤1996)。このようにみると、日本の家族システムは、欧米と比較して、母子間の関係が親密であり、世代間の境界も不明瞭である、いわゆる「問題を持つ家族」となる。

しかし、河合 (1976) は日本の文化には「母性原理」を優勢とする考え方があることを指摘しており、多くの研究においてもこのような視点が支持されている (池田、1996; 中見、1999; 川上、2001) ことから、親子間が親密で境界が不明瞭な家族システムのあり方は日本の特徴であるといえる。よって、欧米と違う文化的背景をもつ日本の家族システムの特徴を踏まえた青年期の精神的自立の特徴を考えていく必要があると思われる。

現在、日本における家族システムと自我同一性の研究については、渡辺 (1989) がその関連を調査しており、同一性達成地位、早期完了地位の青年は家族機能を良好なものとして認知している反面、モラトリアム地位の青年は権威的な家族と認知しながらその中で身動きがとれずに纏綿状態にあり、同一性拡散地位の青年は家族機能がばらばらであると認知していることを示した。また、中村・秋葉 (1992) も、同一性達成地位は家族機能をま

注：前福岡女学院大学人文学研究科 現福岡県発達障害者支援センターゆう・もあ

とまりのある、良いものであると認知している反面、同一性拡散地位における青年の方は望ましくない家族機能を認知していることを明らかにしている。両者とも家族機能を全体的に捉えているため、その力動と詳細な側面は不明であるとともに、このような家族機能と自我同一性に関する研究は、未だごくわずかであり、十分検討されていない現状である。

一方、青年期の精神的自立の問題を取り上げる際に、一般に臨床場面で、青年期の不適応問題がしばしば取り上げられるが、その不適応問題に影響する要因として取り上げられる家族関係の多くが母子関係について注目しているものである。しかし、現在青年期の不適応問題を扱った事例研究には、父親の重要性が述べられており(高橋、1989)、母子関係のみならず、父子関係、両親関係について検討する必要があると考えられることから、家族システム全体を踏まえううえで、それぞれの同一性地位における母子関係、父子関係、両親関係のあり方についてより詳細に検討していくことは、青年期の精神的自立を理解する上で重要であると思われる。

以上のことより、本研究では、青年期の精神的自立と家族システムの関連において、自我同一性地位の違いにより家族システムおよび家族サブシステム(母子間、父子間、両親間)の関係がどのように認知されているのかについて検討し、青年の精神的自立と家族システムのあり方について検討することを目的とする。

その際、本研究では、従来の家族関係研究において主流である質問紙法を用いるのではなく、より客観的に、また、より多面的な家族力動を明らかにするために、人形配置法である Family System Test (Gehring, 1993; 以下 FAST) を用いる。FAST は人形間の距離で「親密さ」を、人形の高さで「階層性」を表し、立体的に家族関係を表現することで、質問紙法や家族画法などでは捉えることのできない空間認知的側面を明らかにする投影的手法のテストである。

研究1：自我同一性地位と家族システムの関連

I. 目的

家族機能の全体的な認知についてより詳しくその機能を検討するために、投影的手法である FAST を用いて調査を行い、自我同一性地位 (Marcia, 1964) による家族システム全体の認知の差について検討することを目的とする。

II. 方法

i. 調査対象

F 県内の大学生37名(男子; 14名、女子; 23名、平均年齢; 21.4歳) 大学院生17名(男子; 5名、女子; 12名、

平均年齢; 23歳) の計54名に調査を行い、家族構成上対象にならないと判断した1名を除く53名を分析対象とした。

ii. 調査期間

2004年8月上旬~12月上旬

iii. 調査内容

① 質問紙「自我同一性地位判定尺度」

加藤(1983)によって作成された、「自我同一性地位判定尺度」を用いる。この尺度は Marcia (1964) が提示した自我同一性地位の概念である、「現在の自己投入」「過去の危機」に、「将来の自己投入の希求」という将来への展望を含めた3変数を用いて測定されるものである。各変数4項目、計12項目で構成されており、回答法は「まったくそのとおりだ(6点)」から「全然そうではない(1点)」の6件法で評定された。

なお、逆転項目についてはその得点の逆を点数化し、それぞれの変数の合計得点を算出した。そして、その合計得点の組み合わせより、「同一性達成地位(以下 A 群)」「権威受容地位(以下 F 群)」「同一性達成-権威受容中間地位(以下 A-F 群)」「積極的モラトリアム地位(以下 M 群)」「同一性拡散地位(以下 D 群)」「同一性拡散-積極的モラトリアム地位(以下 D-M 群)」の6つの地位に判別される。なお、権威受容地位(F 群)においては、早期完了とも訳されているが、本研究では、加藤(1983)に従い権威受容と呼ぶこととする。

② Family System Test (FAST)

Gehring (1993) によって開発された、家族システムを「親密さ」と「階層性」によって表現する人形配置法である。この検査で使用する用具は、目と口が描かれた木製の人形が18体(無彩色の人形男女各6体、彩色の人形男女各3体、いずれも8cm)と、その人形の高さを変えるための円筒のブロックが3種類(低; 1.5cm、中; 3cm、高; 4.5cm)、それぞれ6個ずつ、計18個を使用する。人形を配置するテスト盤は、碁盤の目で区切られていて、5cm×5cmの正方形が9×9=81個から成る白いボードである。FAST は、これらの用具を用いて、被験

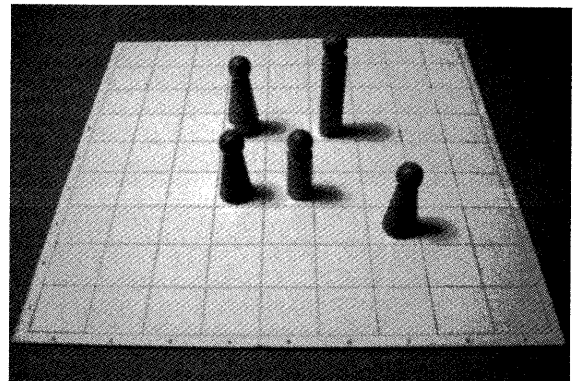


Fig. 1

者の家族関係を「現実場面」「理想場面」「葛藤場面」の3場面について表現してもらう検査である (Fig. 1 参照)。

iv. 手続き

検査は静かな個室で個別に行なわれ、テスト盤が置かれた机に、被験者と検査者が対面する形で着席した。

被験者には、まず質問紙（「自我同一性地位判定尺度（12項目）」）を、次にFASTを実施してもらった。FASTはGehringのマニュアルに従って行なった。まず、被験者に、テスト盤の上に人形を用いて被験者の家族関係を表現してもらうことを伝えた。そして、「親密さ」は「家族メンバーの心理的な親密さや凝集性」を意味し人形間の距離で表現すること、「階層性」は「家族メンバーの力関係や影響力」を意味し、人形の高さで表現することを説明した。

教示後、被験者が検査の内容や表現方法を理解したことを確認した上で、「現実場面」「理想場面」「葛藤場面」表現するよう教示した。各表現後、それぞれの表現についてインタビューを行った。検査に要した時間は、被験者によって異なるが、概ね30分～50分程度であった。

v. FASTの得点と評価

「親密さ」については人形間の距離で評価され、3×3のマスにどれだけ人形が配置されるかによって、「低」「中」「高」の3タイプに分類される。「階層性」については、親下位システムと子下位システム間、つまり親子の高さの差異から、「大」「中」「小」の3タイプに分類される。

また、FASTにおいては、この「親密さ」と「階層性」の評価の組合せから、家族構造を「調和型」・「中間型」・「非調和型」の3タイプに分類している (Fig. 2 参照)。なお、本研究では「現実場面」と「理想場面」のみを使用する。

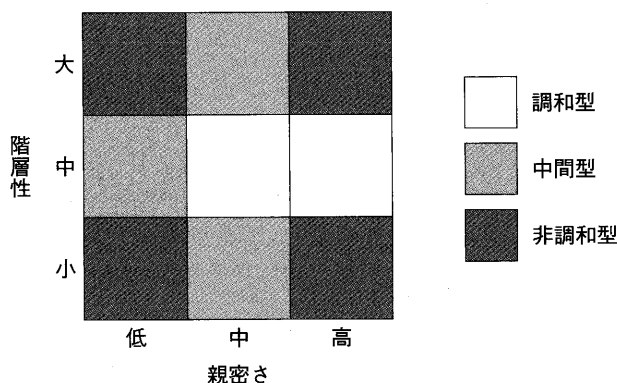


Fig. 2 家族関係構造のタイプ

III. 結果

i. 群分け

加藤（1983）の「自我同一性地位判定尺度」の基準をもとに、本研究の対象者の得点の分布を考慮し、自我同一性地位の分類を行った (Fig. 3 参照)。その結果、A群9名、F群4名、A-F群12名、M群13名、D群5名、D-M群10名となった。男女の内訳は Table. 1 に示す。

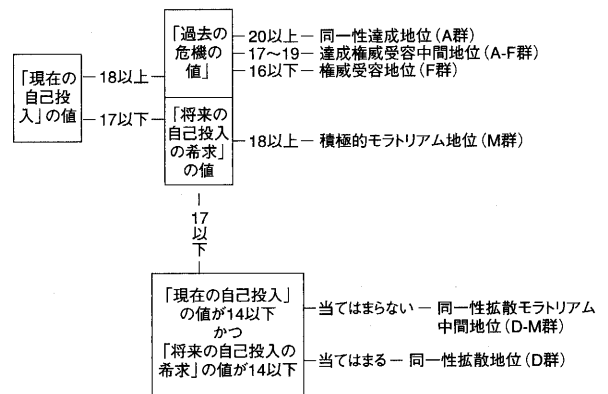


Fig. 3 各同一性地位の分類図

Table 1 各同一性地位の人数

	A群	F群	A-F群	M群	D群	D-M群
男子	2	1	1	7	4	3
女子	7	3	11	6	1	7
合計	9	4	12	13	5	10

なお、各同一性地位の特徴について、加藤（1983）は、A群を「過去に高い水準の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行なっているもの」、F群を「過去に低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入を行っているもの」、A-F群を「中程度の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行なっているもの」、M群を「現在は高い水準の自己投入は行っていないが、将来の自己投入を強く求めているもの」、D群を「現在は低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱いもの」、D-M群を「現在の自己投入の水準が中程度以下のもののうちで、その現在の自己投入の水準が同一性拡散地位ほどには低くないが、将来の希求が積極的モラトリアム地位ほどには高くないもの」と定義づけている。

ii. 自我同一性地位と「親密さ」の関連

FASTによって家族機能における「親密さ」を評定した結果、各同一性地位における「親密さ」の人数比と人数は以下ようになった (Table 2-1 参照)。

Table 2-1 自我同一性地位における親密さの人数比
() 内は人数

	A群		F群		A-F群		
	現実場面	理想場面	現実場面	理想場面	現実場面	理想場面	
親密さ	低	33(3)	33(3)	50(2)	25(1)	33(4)	17(2)
	中	44(4)	33(3)	25(1)	25(1)	42(5)	33(4)
	高	22(2)	33(3)	25(1)	50(2)	25(3)	6(50)
	M群		D群		D-M群		
	現実場面	理想場面	現実場面	理想場面	現実場面	理想場面	
親密さ	低	46(6)	8(1)	80(4)	60(3)	40(4)	40(4)
	中	31(4)	15(2)	20(1)	20(1)	40(4)	10(1)
	高	23(3)	77(10)	-	20(1)	20(2)	50(5)

各同一性地位における「親密さ」に差があるかどうかを検討するために、親密さの程度(低・中・高)による人数比について χ^2 検定を行なった。その結果「現実場面」「理想場面」ともに有意な結果が得られた [$\chi^2(10) = 71.07, p < .01, \chi^2(10) = 114.47, p < .01$]。

そこで、残差分析を行なったところ、「現実場面」では、親密さ「低」においてD群が、A群・A-F群よりも有意に高く、親密さ「中」においてはA群が、F群・D群よりも有意に高く、親密さ「低」においては、D群が他の群よりも有意に低いという結果であった (Table 2-2 参照)。「理想場面」では、親密さ「低」においてD群・D-M群が、A-F群・M群よりも有意に高く、親密さ「中」においてはA群・A-F群が、M群・D-M群よりも有意に高く、親密さ「高」においては、M群が、A群・D群よりも有意に高いという結果であった (Table 2-3 参照)。

Table 2-2 各セルにおける調整された残差

		親密さ (「現実場面」)		
		低	中	高
A	群	-3**	2.5*	.8
F	群	.6	-2*	1.6
A-F	群	-3.1**	1.9+	1.6
M	群	-.2	-.6	1.1
D	群	7.2**	-3.2**	-5.3**
D-M	群	-1.6	1.5	.2

+ p < .10, * p < .05, ** p < .01

Table 2-3 各セルにおける調整された残差

		親密さ (「理想場面」)		
		低	中	高
A	群	.7	2.8**	-3**
F	群	-1.3	.6	.7
A-F	群	-3.2**	2.7**	.7
M	群	-5.3**	-2*	6.6**
D	群	7**	-.7	-5.9**
D-M	群	2.2*	-3.3**	.7

+ p < .10, * p < .05, ** p < .01

iii. 自我同一性地位と「階層性」の関連

FASTによって家族機能における「階層性」で評定し

た結果、各同一性地位における「階層性」の人数比と人数は以下ようになった (Table 3-1 参照)。

Table 3-1 自我同一性地位における階層性の人数比
() 内は人数

	A群		F群		A-F群		
	現実場面	理想場面	現実場面	理想場面	現実場面	理想場面	
階層性	小	33(3)	78(7)	100(4)	100(4)	50(6)	33(4)
	中	67(6)	22(2)	-	-	50(6)	67(8)
	大	-	-	-	-	-	-
	M群		D群		D-M群		
	現実場面	理想場面	現実場面	理想場面	現実場面	理想場面	
階層性	小	54(7)	39(5)	40(2)	40(2)	20(2)	20(2)
	中	46(6)	62(8)	60(3)	60(3)	80(8)	80(8)
	大	-	-	-	-	-	-

各同一性地位における「階層性」に差があるかどうかを検討するために、階層性の程度(小・中)による人数比について χ^2 検定を行なった。その結果、「現実場面」「理想場面」において、有意な結果が得られた [$\chi^2(5) = 152.15, p < .01, \chi^2(5) = 187.74, p < .01$]。

そこで、残差分析を行なったところ、「現実場面」では、階層性「小」において、F群が、A群・D群・D-M群よりも有意に高く、階層性「中」においてA群・D群・D-M群が、F群よりも有意に高いという結果であった (Table 3-2 参照)。「理想場面」では、階層性「小」において、A群・F群が、A-F群・M群・D群・D-M群よりも有意に高く、階層性「中」において、A-F群・M群・D群・D-M群が、A群・F群よりも有意に高いという結果であった (Table 3-3 参照)。

Table 3-2 各セルにおける調整された残差

		階層性 (「現実場面」)	
		小	中
A	群	-3.6**	3.6**
F	群	11.1**	-11.1**
A-F	群	.1	-.1
M	群	1	-1
D	群	-2.1*	2.1*
D-M	群	-6.5**	6.5**

+ p < .10, * p < .05, ** p < .01

Table 3-3 各セルにおける調整された残差

		階層性 (「理想場面」)	
		小	中
A	群	5.8**	-5.8**
F	群	10.1**	-10.1**
A-F	群	-4.1**	4.1**
M	群	-2.9**	2.9**
D	群	-2.5*	2.5*
D-M	群	-7**	7**

+ p < .10, * p < .05, ** p < .01

iv. 自我同一性地位と「家族構造」の関連

FASTによって得られた「親密さ」と「階層性」の結

果から、「家族構造」タイプを Gehring の評価基準に従って評価した結果、各同一性地位における「家族構造」タイプの人数比と人数は以下ようになった (Table 4-1 参照)。

Table 4-1 自我同一性地位における家族構造の人数比 (() 内は人数)

家族構造	A群		F群		A-F群	
	現実場面	理想場面	現実場面	理想場面	現実場面	理想場面
調和	56(5)	22(2)	-	-	42(5)	58(7)
中間	22(2)	33(3)	25(1)	25(1)	33(4)	17(2)
非調和	22(2)	44(4)	75(3)	75(3)	25(3)	25(3)
家族構造	M群		D群		D-M群	
	現実場面	理想場面	現実場面	理想場面	現実場面	理想場面
調和	31(4)	54(7)	-	20(1)	50(5)	50(5)
中間	31(4)	8(1)	80(4)	60(3)	40(4)	30(3)
非調和	38(5)	38(5)	20(1)	20(1)	10(1)	20(2)

各同一性地位における「家族構造」タイプに差があるかどうかを検討するために、家族構造の程度（調和型・中間型・非調和型）による人数比について χ^2 検定を行った。その結果、「現実場面」「理想場面」において、有意な結果が得られた [$\chi^2(10) = 244.49, p < .01, \chi^2(10) = 195.55, p < .01$]。

そこで、残差分析を行なったところ、「現実場面」では、家族構造タイプの「調和型」において、A群・A-F群・D-M群が、F群・D群よりも有意に高く、「中間型」においてD群が、A群・F群よりも有意に高く、「非調和型」において、F群が、A群・D群・D-M群よりも有意に高いという結果であった (Table 4-2 参照)。

Table 4-2 各セルにおける調整された残差

家族構造 (「現実場面」)		調和	中間	非調和
A	群	6.3**	-3.7**	-2.3*
F	群	-7.1**	-3**	10.1**
A-F	群	2.9**	-1.2	-1.6
M	群	.2	-1.8+	1.6
D	群	-7.1**	9.4**	-2.8**
D-M	群	4.8**	.4	-5.1**

+ p < .10, * p < .05, ** p < .01

「理想場面」では、家族タイプの「調和型」において、A-F群・M群・D-M群が、A群・F群・D群よりも有意に高く、「中間型」においてD群が、A-F群・M

Table 4-3 各セルにおける調整された残差

家族構造 (「理想場面」)		調和	中間	非調和
A	群	-2.7**	1.1	1.7+
F	群	-7.9**	-.9	8.6**
A-F	群	5.6**	-2.9**	-2.8**
M	群	4.5**	-5.1**	.3
D	群	-3.3**	7.6**	-3.9**
D-M	群	3.7**	.3	-3.9**

+ p < .10, * p < .05, ** p < .01

群よりも有意に高く、「非調和型」においてF群がA-F群・D群・D-M群よりも有意に高いという結果であった (Table 4-3 参照)。

IV. 考察

i. 自我同一性地位と「親密さ」の関連

「親密さ」においては、「現実場面」で同一性拡散地位が、同一性達成地位、達成-権威受容中間地位より、家族メンバーの親密さが低く、同一性達成地位、達成-権威受容中間地位が、権威受容地位、同一性拡散地位より家族メンバーの親密さが中程度であると認知していることが示された。

これより、現実の家族関係において、自己確立のできていない同一性拡散地位は、家族間の親密さが低い、つまりバラバラであると感じており、渡辺 (1989) や中村ら (1992) の結果と一致している。

自己確立ができていない同一性達成地位、達成-権威受容中間地位は、家族間の親密さを密着することもなく、程よい距離をとりながらも近くに感じていることが分かる。

また、自己確立の段階にいながら、同一性拡散地位と同様、親密さへの認識が低かった権威受容地位に関しては、別の要因が働いていることが考えられ、さらなる検討が必要であると思われる。

一方、家族関係の「理想場面」においては、同一性拡散地位、拡散-モラトリアム中間地位が、達成-権威受容中間地位、積極的モラトリアム地位よりも家族メンバーの親密さが低く、積極的モラトリアム地位が同一性達成地位、同一性拡散地位よりも親密さが高くなって欲しいと望んでいるということが明らかになった。

すなわち、同一性拡散地位が現実場面と同様に親密さが低い家族関係を望んでおり、拡散-モラトリアム中間地位も、同一性拡散地位ほど高くはないが親密さが低くなって欲しいと思う割合が増えているといえる。

同一性達成地位、達成-権威受容中間地位については、現実場面とあまり変わらないが、達成-権威受容中間地位の方が、より程よい親密さを望んでおり、同一性達成への段階を進むにつれて、親サブシステムとの関係が程よく近い関係として保つようになることが推測される。

また、積極的モラトリアム地位は同一性達成地位や同一性拡散地位よりも高い親密さを望んでおり、積極的に家族と関わろうとする姿勢がうかがえる。

以上のことより、青年が自己を確立していくためには、ある程度、家族との高い親密さが必要となり、達成への段階を進むにつれ、程よい関係を保てるようになると思われる。

ii. 自我同一性地位と「階層性」の関連

「階層性」については、従来の大学生に実施された

FAST 研究 (池田, 1997) と同様に、「階層性」が「大」と評価されるものは全くなかった。

場面ごとにみると、「現実場面」では、権威受容地位が同一性達成地位、同一性拡散地位、拡散-モラトリアム中間地位より家族間の階層性を小さいか、あるいは子どもの方の力が親よりも高いと認知している。

「理想場面」では、同一性達成地位、権威受容地位が、達成-権威受容中間地位、積極的モラトリアム地位、同一性拡散地位、拡散-モラトリアム中間地位よりも家族間の階層性を小さくしたい、あるいは子どもの力が親よりも大きくなってほしいと認知しているといえる。

これより、現実の家族関係において、権威受容地位が同一性達成地位、同一性拡散地位、拡散-モラトリアム中間地位に比べ、親サブシステムの影響力、権威の強さをあまり感じていないこと、同一性達成地位、同一性拡散地位、拡散-モラトリアム中間地位は、逆に親の力が子どもより少し高いと認識していることが推測される。

渡辺 (1989) によると、権威受容地位の人は、自分の家族を権威的な家族と認知しているが、本研究ではむしろ逆の結果となっている。

すなわち、権威受容地位は、親が権威的であっても子がそれを肯定的に捉え、あまりぶつかり合うことなく自己を確立しているために、実際は親の影響を受けていても、子の意識の面では権威的であると感じることが少ないのではないかと考えられる。

ゆえに、同じ自己確立の段階にいる同一性達成地位と権威受容地位との違いは、親の権威、力などをどのように認識しているかにあることが考えられる。ただし、本研究では対象人数が少なく、特に権威受容地位においては他の群よりも人数が少なかったことから、より多くの対象者による検討が必要である。

家族関係の「理想場面」においては、同一性達成地位、権威受容地位が他の群よりも親サブシステムの影響力が小さくなる、あるいは子どもの力が大きくなることを望んでおり、達成-権威受容中間地位、積極的モラトリアム地位、同一性拡散地位、拡散-モラトリアム中間地位は親サブシステムに子どもより大きい力を持っていて欲しいと望んでいる様子がうかがえた。

ただし、同一性達成地位、権威受容地位は自我同一性の確立という共通性があるが、そのための危機や葛藤の経験の有無については、違いがある。両者において、親の影響力を越え、子どもの力が大きくなることを望むことは共通しており、それが自我同一性の確立を表わすものとして理解しうる様相であるとしても、その動機及び内面的心理については今後さらなる検討が必要である。

iii. 自我同一性地位と「家族構造」の関連

「家族構造」のタイプについて、「現実場面」では同一性達成地位、達成-権威受容中間地位、拡散-モラトリアム中間地位が家族構造を調和していると認知し、同一

性拡散地位は中間型、権威受容地位は非調和型の家族構造であると認知していた。

さらに、「理想場面」では達成-権威受容中間地位、積極的モラトリアム地位、拡散-モラトリアム中間地位が調和した家族構造を、同一性拡散地位が中間型の家族構造、同一性達成地位、権威受容地位が非調和型の家族構造を望んでいる傾向にあるということが示された。

「現実場面」に関しては、先行研究 (渡辺1989、中村ら1992) の中でも、自己確立を達成している同一性達成地位は家族間が調和し、まとまっていると認知していることを示しており、本研究の結果と一致する。

ところで、同じく自己確立を達成している状態の権威受容地位については同一性達成地位と比較しても非調和的であると認知している割合が高く、従来の結果とは一致しない。

しかし、権威受容地位は「階層性」において「小」と認知した者が多かったことを考慮すると、結果的に非調和的な家族構造認知になってしまったことが考えられる。

これより、同一性達成地位、権威受容地位ともに、家族がまとまっているもの、肯定的であると捉えているという点では一致しているが、空間的な認知に関しては差異があり、その差異が同一性達成地位と権威受容地位に分かれる要因であるといえよう。

同一性拡散地位については、親密さでは他の群より有意に低いという結果が得られたことから、家族がバラバラであると感じていることが示されたが、「階層性」において、親サブシステムの力の大きさを、中程度であると認識していることから、結果的に中間型家族構造と認知しているものが多くなっている。

このことより、同一性拡散地位は親サブシステムの影響力を強く受けることもなく、さらに親密さも低いことから、中村ら (1992) のいう、家族からの締め付けのない、放任的な雰囲気が高い家族構造であることが考えられる。

「理想場面」においては、同一性達成地位と積極的モラトリアム地位以外は「現実場面」での家族構造タイプと比較してあまり変化がみられない。

達成-権威受容中間地位に関しては、調和的な構造を望むという点では変化はないが、比率的に「現在場面」より高くなっている。これは、同一性達成地位、達成-権威受容中間地位、積極的モラトリアム地位が、現状維持よりも積極的な変化を求めている状態であることが考えられる。

同一性達成地位は、非調和的な家族構造を望んでいるが、個としての自分を確立し、世代間の境界を確立させ自立へと進む過程 (亀口1992) を経ていると推測されるため、肯定的に捉えて良いものと思われる。

達成-権威受容中間地位については、権威受容地位の特徴であるまとまりのよさ、家庭への密着、凝集性 (渡辺1989、中村ら1992、岡田1993) などの要素を多く持つ

ていると考えられる。

積極的モラトリアム地位については、「理想場面」ではより家族と調和的になることを望んでおり、家族と積極的に関わろうという意志を持っていることがうかがえる。

研究2：自我同一性地位と家族サブシステム（母子・父子・両親間）との関連

I. 目的

研究1において、各同一性地位により家族システム認知に差異があることが明らかとなったが、自己を確立している状態が異なるにも関わらず、同様の家族システム認知がみられたり、自我同一性の確立の有無に関して同じ立場であるにも関わらず、家族システム認知に差異があるという結果が得られた。

この背景には、それぞれの地位の心理的特徴が関わっていることが推察されるが、それに加え、家族システムに対する表面的で全体的な認知では明らかにできない差異があるといえる。

このような差異の検討については、親子間の交流が、アイデンティティや他者との関係性に関連していること（平石2000）、両親関係のあり方が子どもの独立性に影響を及ぼすこと（大下1999）などから、家族サブシステムのあり方が重要な要因として示唆されている。

また、自我同一性の獲得という、いわゆる青年期の精神的自立を考える際に、今まで依存してきた親から離れ、見守られながら、親から認められ対等な関係を築いていく、というプロセス（落合・佐藤1996）を考慮すると、2者関係の親密さを検討することが妥当であると考えられる。

以上のことより、研究2においては、自我同一性地位の違いにおける、母子関係、父子関係、両親関係認知の差異について検討する。

具体的には、家族サブシステムの親密さを投影的に捉える指標として、FASTにおける人形間（本人-母親間、本人-父親間、母親-父親間）の実際の距離を用いることとする。その際、実際に本人がその関係をどう捉えているかについてのインタビューを実施し、その内容も合わせて考察することにより、同一性地位における家族サブシステムのあり方について多面的に検討することを目的とする。

II. 方法

i. 調査対象・調査期間

研究1において、「自我同一性地位尺度」の質問紙とFASTを用いた面接を実施する際、同時に「母子関係」「父子関係」「両親関係」に関する簡単なインタビュー

を行なった。そのため、対象者・調査期間については研究1と同様である。

ii. 調査内容

①FAST ②「母子関係」「父子関係」「両親関係」に関する面接調査

iii. 手続き

研究1において実施されたFASTでの「現実場面」の表現・インタビュー部分終了後、次のような設問を加えた。その内容は、次のとおりである；①ここに表現した関係の中で、あなたとお母さんの関係はどのようなものだと感じていますか？②ここに表現した関係の中で、あなたとお父さんの関係はどのようなものだと感じていますか？③ここに表現した関係の中で、あなたから見た両親の関係はどのようなものだと感じていますか？

iv. 距離の算出方法

本人と母親、本人と父親、両親間の親密さを表す指標として、表現された人形間の距離を算出した。テスト盤の最も左下のマス目を原点として、X座標 Y座標を設定し、(X1, Y1) というように人形の位置を表し、ピタゴラスの定理を当てはめ2者間の距離を算出した。その結果、最短距離、つまり人形が隣り合う場合は1.4、最大距離、つまり人形が対角線上に配置される場合は11.3となった。なお、本研究では「現実場面」と「理想場面」における2者間の距離を使用する。

v. 面接調査内容の内容整理

面接調査内容の評価については、心理学を専攻する教員および大学院生3名と筆者によって判定した。評価者は上記の「現実場面」における「母子関係」「父子関係」「両親関係」に関する面接調査の内容を査読し、その内容を「肯定的」、「否定的」、「どちらともいえない」の3つの段階に判定し、全員一致の評価によって3通りに分類した。各段階分類の指標となった内容の例は以下のとおりである。

- ・「肯定的」；「お互いが尊重している関係」「話し合える良い関係」など、関係を肯定的に捉えているもの。
- ・「否定的」；「仲が悪い」「一緒にいて逆らえない、いい関係とはいえない」など、関係を否定的に捉えているもの。
- ・「どちらともいえない」；「良くも悪くもない」「波がある。いい時はいいが、悪い時は最悪」など、はっきりした肯定・否定のイメージを持っていない、あるいは肯定的な部分と否定的な部分を感じているもの。

Ⅲ. 結果

i. 自我同一性地位と「母子関係」の関連

① 母子間の距離

各地位における、場面ごとの母子間の距離の平均については Table 5-1 に示す。各地位（6群）と場面（理想・現実）における、母子間の距離について6×2の2要因分散分析を行なったところ、有意な結果は得られなかった。

Table 5-1 各地位における母子間の距離（平均）

	A群	F群	A-F群	M群	D群	D-M群
現実場面	1.7	2.3	1.7	2.1	3.4	2
理想場面	1.6	1.3	1.6	1.5	3.1	2.1

② 母子関係認知

現在の本人と母親の関係についてのインタビューの内容を、「肯定的」「否定的」「どちらでもない」の3通りに分類したところ、各同一性地位における母子関係認知の人数比と人数は以下ようになった（Table 5-2 参照）。

Table 5-2 自我同一性地位における母子関係認知の人数比（()内は人数）

		A群	F群	A-F群	M群	D群	D-M群
母子関係	肯定	67(6)	75(3)	67(8)	54(7)	100(5)	70(7)
	否定	-	-	17(2)	8(1)	-	10(1)
	どちらでもない	33(3)	25(1)	17(2)	39(5)	-	20(2)

各同一性地位における「母子関係」認知に差があるかどうかを検討するために、母子関係認知の程度(肯定的・否定的・どちらでもない)による人数比について χ^2 検定を行なったところ、有意な結果が得られた [$\chi^2(10) = 100.49, p < .01$]。

そこで、残差分析を行なった結果、母子関係認知の「肯定的」においては、D群がM群よりも有意に高く、「否定的」においてはA-F群がA群・F群・D群よりも有意に高く、「どちらでもない」においてはA群・M群がD群よりも有意に高いという結果であった（Table 5-3 参照）。

Table 5-3 各セルにおける調整された残差

		母子関係（「現実場面」）		
		肯定的	否定的	どちらでもない
A	群	-1.2	-2.7**	2.8**
F	群	.7	-2.7**	.7
A-F	群	-1.4	5.2**	-1.4
M	群	-4.5**	1	4.3**
D	群	6.8**	-2.7**	-5.9**
D-M	群	-.5	2+	-.6

+ p < .10, * p < .05, ** p < .01

ii. 自我同一性地位と「父子関係」の関連

① 父子間の距離

各地位における、場面ごとの父子間の距離の平均については Table 6-1 に示す。各地位（6群）と場面要因（理想・現実）における、父子間の距離について6×2の2要因分散分析を行なったところ、場面要因において主効果が見られた [$F(1, 11) = 9.130, p < .01$]。これより、父子間の距離において地位ごとによる差異は見られなかったが、全体的に現実よりも、理想では近くなりたいと感じている傾向にあるということがわかる。

Table 6-1 各地位における父子間の距離（平均）

	A群	F群	A-F群	M群	D群	D-M群
現実場面	2.3	2.5	2	2.5	3.7	2
理想場面	1.8	1.7	1.6	1.3	3.1	1.6

② 父子関係認知

現在の本人と父親の関係についてのインタビューの内容を、「肯定的」「否定的」「どちらでもない」の3通りに分類したところ、各同一性地位における父子関係認知の人数比と人数は以下ようになった（Table 6-2 参照）。

Table 6-2 自我同一性地位における父子関係認知の人数比（()内は人数）

		A群	F群	A-F群	M群	D群	D-M群
父子関係	肯定	44(4)	75(3)	50(6)	62(8)	80(4)	70(7)
	否定	11(1)	-	25(3)	15(2)	-	-
	どちらでもない	44(4)	25(1)	25(3)	23(3)	20(1)	30(3)

各同一性地位における「父子関係」認知に差があるかどうかを検討するために、父子関係認知の程度(肯定的・否定的・どちらでもない)による人数比について χ^2 検定を行なったところ、有意な結果が得られた [$\chi^2(10) = 92.34, p < .01$]。

そこで、残差分析を行なった結果、父子関係認知の「肯定的」においては、F群・D群がA群・A-F群よりも有意に高く、「否定的」においてはA-F群・M群がF群・D群・D-M群よりも有意に高く、「どちらでもない」においてはA群がD群よりも有意に高いという結果であった（Table 6-3 参照）。

Table 6-3 各セルにおける調整された残差

		父子関係（「現実場面」）		
		肯定的	否定的	どちらでもない
A	群	-4.3**	1	4**
F	群	2.6**	-3.3**	-.7
A-F	群	-3.1**	6.5**	-.7
M	群	-.4	2.5*	-1.2
D	群	3.7**	-3.3**	-1.9+
D-M	群	1.5	-3.3**	.5

+ p < .10, * p < .05, ** p < .01

iii. 自我同一性地位と「両親関係」の関連

① 両親間の距離

各地位における、場面ごとの両親間の距離の平均については Table 7-1 に示す。各地位（6群）と場面（理想・現実）における、実際に表現された両親間の距離について6×2の2要因分散分析を行なったところ、場面において主効果の傾向が見られた [F(1, 11)=3.094, .05<p<.10]。これより、両親間の距離において地位ごとによる差異は見られなかったが、全体的に現実よりも、理想では両親に仲良くなって欲しいと感じているということがいえる。

Table 7-1 各地位における両親間の距離（平均）

	A群	F群	A-F群	M群	D群	D-M群
現実場面	2.6	3.9	1.8	1.7	2.1	1.4
理想場面	1.3	1.4	1.1	1	1.7	1.3

② 両親関係認知

FAST と同時に行なわれた、現在の両親の関係についてのインタビューの内容を、「肯定的」「否定的」「どちらでもない」の3通りに分類したところ、各同一性地位における母子関係認知の人数比と人数は以下のようになった (Table 7-2 参照)。

Table 7-2 自我同一性地位における両親関係認知の人数比（()内は人数）

		A群	F群	A-F群	M群	D群	D-M群
両親関係	肯定	44(4)	75(3)	58(7)	62(8)	80(4)	30(3)
	否定	33(3)	25(1)	17(2)	15(2)	20(1)	20(2)
	どちらでもない	22(2)	-	25(3)	23(3)	-	50(5)

各同一性地位における「両親関係」認知に差があるかどうかを検討するために、母子関係認知の程度(肯定的・否定的・どちらでもない)による人数比について χ^2 検定を行なったところ、有意な結果が得られた [$\chi^2(10)=126.94, p<.01$]。

そこで、残差分析を行なった結果、両親関係認知の「肯定的」においては、F群・D群がA群・D-M群よりも有意に高く、「否定的」においてはA群がM群よりも有意に高く、「どちらでもない」においてはD-M群がF群・D群よりも有意に高いという結果であった (Table 7-3 参照)。

Table 7-3 各セルにおける調整された残差

		両親関係（「現実場面」）		
		肯定的	否定的	どちらでもない
A	群	-3.1**	3.1**	.6
F	群	3.7**	.9	-5.5**
A-F	群	-.1	-1.2	1.4
M	群	.8	-1.8+	.8
D	群	4.8**	-.5	-5.5**
D-M	群	-6.3**	-.5	8.2**

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01

IV. 考察

i. 自我同一性地位における母子関係のあり方について

各地位における母子間の距離（親密さ）には差がなく、現実場面、理想場面においてもそれほど差は見られなかったが、全体的に「理想場面」において距離が近くなっているため、理想ではより母親と親密になりたい思いがあることが推測される。

一方、同一性拡散地位においては、有意差がみられなかったものの、「現実場面」では同一性達成地位、達成-権威受容中間地位の2倍、「理想場面」では、拡散-モラトリウム中間地位以外の地位の2倍かそれ以上であることから、他の群より母親との関係が希薄ではないかと考えられる。

母子関係に対する認知については、全体的に肯定的に捉えているが、同一性拡散地位は全員が肯定的に捉えているという結果となり、他の群と比べても高い結果となっている。しかし、前述したように、同一性拡散地位は全体的に比較してみても、母親との関係が希薄であることが明らかになっていることから、希薄であるがゆえに母親とぶつかり合うことが少なく、そのため母親の否定的な部分を感じていない、疑問に思うことが少ない状態であることが予測される。

達成-権威受容中間地位においては、他の群よりも、母親を否定的に捉えているようで、拡散-モラトリウム中間地位にもその傾向が見られた。

達成-権威受容中間地位は、中村ら (1992) によると、権威受容地位に近い家族機能認知を示すが、研究1における結果では、むしろ同一性達成地位に近い家族機能認知をもっていることが考えられるため、権威受容地位よりも否定的な面がみえているということは、達成に向けての一過程であると考えられる。

同一性達成地位、積極的モラトリウム地位については、母親との関係を否定的な面も肯定的な面も認知している、あるいは、あまり良いとも悪いともいえない、と感じているものが多くみられた。

内容を詳しく検討すると、同一性達成地位の方が「仲は悪くないが、良いともいえない」とあまりはっきりした感情を持っていない内容であることに対し、積極的モラトリウム地位は「関係は悪くはないけど、色々言うのでそっぽ向いてしまう時がある」「仲は悪くないけど母が強い」「いい時はいいけど、悪い時は悪い」など、いい関係と捉える反面、それに納得できない、嫌だと感じてしまうという、アンビバレントな内容が多くみられている。

このことから、両者が母子関係について同様に「どちらでもない」と認知しているとしても、同一性達成地位は過去に危機を経験し、乗り越えていることから、母親との関係を悩み、すでに乗り越えた結果としての認知であること、積極的モラトリウム地位は積極的に自分のあ

り方を模索している段階ということから、今現在母親との葛藤を抱いている状態での認知であることが推測される。

ii. 自我同一性地位における父子関係のあり方について

各地位における父子間の距離（親密さ）にはそれほど差がみられなかったが、全体的に、「理想場面」では「現実場面」より距離が近くなって欲しいと感じている傾向にあることが明らかとなった。

母子間の距離と比較すると、父子間の距離の方が離れているが、これは従来のFASTの研究からみられている青年期の特徴であり（池田1997）、父親は母親より関係がより希薄である一般的な現状を表わしたものと考えられる。

父子関係に対する認知については、権威受容地位、同一性拡散地位が他の群よりも肯定的に捉えているようである。権威受容地位においては、その心理的特徴から、親などの意見や価値観を疑問に感じることなく受け入れるということが考えられ、そのため家族の中でも価値観や決定権を握る父親に対してあまりぶつかりとせず、安易に肯定的な意識を持ちやすいと思われる。

同一性拡散地位については、父親との距離が地位の中でも最も離れており、関係の希薄さが考えられたが、面接調査の内容では、「尊敬できる大きい存在」「友達みたいな関係」など、関係の希薄さをあまり感じないものが多くみられた。

同一性拡散地位の家族機能認知の特徴として、中村（1992）は拘束性の低さや、放任的雰囲気があることを示唆しており、このことから、家族からの締め付けをあまり感じない同一性拡散地位は、父親との心理的な密着感が低いため、あまり父親の否定的側面、あるいは批判的な側面に関する感情が沸きにくいと思われ、結果的に父子関係が肯定的であると認知しているのかもしれない。

達成－権威受容中間地位においては、父子関係を否定的に捉えているものが権威受容地位より多く、母子関係に対する認知と同様、どちらかという同一性達成群に近いことから、母子関係、父子関係において否定的な側面を捉えることは、同一性達成にむけての一過程であることが推測される。

同一性達成地位においては、母子関係に対する認知と同様、「どちらでもない」と捉えているものが多くみられた。面接調査の内容では、「殆ど一緒にいないから分からない」「気を使えばいい関係」「自分から距離を置く」「仕事では尊敬しているが素直に聞けない」など、あまり一貫せず、ばらばらの印象を受ける。同一性達成地位の心理的特徴から考えても、自己を確立しているため、父親との関係についても、すでに乗り越えた結果としての認知だと思われる。

面接調査の内容に一貫性が乏しかったことに関しては、日本の家族システムにおいて、母親との関係より父親と

の関係の方が希薄であるという特徴（池田1997）によって、個人差が大きいことが影響したのではないだろうか。

iii. 自我同一性地位における両親関係のあり方について

各地位における両親間の距離（親密さ）にはそれほど差がみられなかったが、全体的には、「理想場面」では現実より距離が近くなって欲しいと感じていることが明らかとなった。

両親関係に対する認知については、父子関係認知と同様、権威受容地位、同一性拡散地位が他の群よりも肯定的に捉えているようである。権威受容地位においては、母子関係認知で有意な差が得られなかったものの、群内では75%が肯定的な母子関係であると認知しており、母子関係、父子関係、両親関係において、どの関係においても肯定的に認知していることが伺える。これは、権威受容地位の、親との関係や価値観を批判することなく自然に受け入れるといった心理的特徴と一致するものであると思われる。

同一性拡散地位は、母子関係、父子関係ともに肯定的に捉えていたが、同様に両親の関係に対しても肯定的である。既述したように、家族システム全体の認知においては、まとまりのない、親密さの低い家族として認知していたが、意識的には肯定的なイメージを持っており、両親からの締め付けがない分、ぶつかり合わずに、両親の良い面について認知しやすいと思われる。

同一性達成地位においては、母子関係、父子関係に対して否定的な認知が有意に高かったとはいえないが、両親関係においては否定的なイメージを他の群より多く捉えていることが示された。

この結果には、自己を確立し、親とのほどよい関係をもつようになることによって、両親関係に対して客観的な見方や自分なりの価値観をもって対等な目線でみるようになったことが影響しているのではないかとと思われる。

拡散－モラトリアム中間地位は、他の地位に比べて、否定的な面も肯定的に認知している、あるいはあまり良いとも悪いともいえないといった「どちらでもない」という側面で両親を捉えていることが示された。

面接調査の内容では、「仲は悪いけど釣り合いが取れている」「どっちもどっちお互いの悪いことをお互いが補う」など、両親関係自体は否定的に捉えているが、それでもよしとする、バランスが取れた見方の内容が多くみられた。

拡散－モラトリアム中間地位が両親関係に対して否定的側面を肯定的に捉えることについては、同一性拡散地位の特徴である、まとまりのない家族システム認知と、積極的モラトリアムの特徴である積極的に関わろうとする意欲という相反する様相をもっていることを考慮すると、関心のなさからくる第3者的態度によるもの、あるいは、肯定的に捉えたいという積極的態度によるものどちらかが背景にあると思われる。

4. まとめ

本研究では、青年期の精神的自立を、自我同一性地位という側面から捉え、研究1では自我同一性地位と家族システムとの関連について、研究2では自我同一性地位と家族サブシステム（母子間、父子間、両親間）との関連について検討した。

その結果、各地位における、家族システム認知や家族サブシステム認知において、有意な差がみられ、同一性地位の差異により、家族システム認知が異なることが示された。

同一性達成地位においては、家族間の親密さも程よく、親との間に程よい世代間境界を持ち、従来の研究（渡辺1989、中村ら1992）と同様、調和的な家族構造を認知していることが示された。家族サブシステムの認知に関しては、母子関係、父子関係ともに、「良くも悪くもない」といったような、肯定的とも否定的ともいえない、あるいは両方の部分を感じているといったような認知の特徴があった。なお、両親関係については他の地位より否定的な側面を感じている様子がうかがえた。同一性達成地位は、その心理的特徴から、親サブシステムからの精神的自立ができていると思われ、それゆえに他の地位より個対個として親と接することが可能であることを考慮すると、親の否定的側面という現実的な部分が他の地位より見えやすかったのではないと思われる。

権威受容地位においては、親と子の力関係が同じか、あるいは子どもが力を持っている関係が多く、そのため非調和的な家族構造を認知していることが示された。しかし、非調和的であっても、家族に対する意識は肯定的であり、母子関係、父子関係、両親関係ともに肯定的に捉えていたことが特徴的である。研究1では親サブシステムとの力関係の結果が従来の権威受容地位の家族機能認知とは異なっていたが、親が権威的でもそれを肯定的に捉え、あまりぶつかり合うことなく自己を確立しているという心理的特性から、実際は親の影響を受けながらもそのことを意識的に感じるものが少ないのではないかと考えられた。

達成-権威受容中間地位においては、親密さや力関係を程よく感じている傾向にあることから、調和的な家族構造を認知していることが示された。家族構造認知については、どちらかという同一性達成地位のあり方に近く、家族サブシステムにおいて、母子関係、父子関係ともに、他の群より否定的な側面を捉えていることから、同一性達成に向けての一過程であるためと思われる。

積極的モラトリアム地位においては、現実の関係では特に他の地位と比較して有意に高い家族システムの認知は見られなかったが、「理想場面」の関係において、家族メンバーとより親密な、より調和的な家族システムを望んでいることが特徴的である。家族サブシステム認知においては、母子関係においてアンビバレントな側面、

父子関係においては否定的な側面を認知していたことから、積極的に自分のあり方を模索している状態であるため、母親や父親との葛藤を抱えていることが推測される。

同一性拡散地位においては、家族のまとまりが低く、ばらばらであると認知しており、その点においては従来の研究（渡辺1989、中村ら1992）と一致する結果であった。一方で、親の影響力を程よく感じる中間型の家族構造を認知していること、また、家族サブシステムの認知において、母子関係、父子関係、両親関係ともに肯定的に捉えていることが示された。これより、家族間の距離が離れて希薄である地位であるため、母親や父親と向かい合い、ぶつかり合うことができずに良い側面しか見えておらず、結果的に自己確立への意識が薄いのではないかとこの拡散地位像が推測された。しかし、家族の否定的側面を捉えているという、渡辺（1989）、中村・秋葉（1992）とは異なる結果となり、今後検討を重ねることが必要である。

拡散-モラトリアム中間地位においては、家族のまとまり、力関係も中程度で調和的な家族システムを認知していることが示された。家族サブシステム認知については、母子関係でやや否定的な傾向が、両親関係で、“どちらともいえない”と捉えていることが示された。両親関係認知では、「仲は悪いけど釣り合いが取れている」などといった、否定的側面も肯定的に捉えようとする内容が多いことが特徴的であった。

以上のことより、自我同一性地位における家族システム全体の認知には違いがあり、システム全体からみれば同じように家族を認知していても、家族サブシステムの認知や、これからの理想の関係については各地位ごとに差異があることが明らかになった。

今回は性差を検討することができなかったが、FASTを用いた研究を始め、家族認知に関する研究においては、男女差がみられることが殆どであるため、家族システム・サブシステムについても性差がみられることが予測される。そのため、性差については今後検討を重ねる必要があると思われる。

また、自我同一性各地位における家族サブシステムの認知について考察することにより、必ずしも親子関係や両親の関係について否定的に捉えることが悪い影響を及ぼすことではないこと、逆に肯定的に捉えることが自己の確立に良い影響を及ぼすわけではないことが示唆された。

青年は、自我同一性の確立に向けて親に依存し、ぶつかり合って葛藤を感じ、離れようとすることを繰り返しながら、同一性を獲得していくのであり、FASTの投影的手法による調査を通して、そのような家族間の力動およびその有機的関連性をより多面的に示すことができたと思われる。

参考・引用文献

- 池田 和夫 1997 日本人を対象としたFAST使用例 FAST (Family System Test) マニュアル ユニオンプレス
- 池田 和夫 2000 日本人大学生の独立意識と親子間の親密さに関する研究 高知大学学術研究報告、49、105-113
- Erikson, E.H. 1959 Identity and life cycle. New York: International Universities Press. (エリクソン, E.H. 自我同一性 小此木啓吾訳編 誠信書房 1973)
- 大下 晶子 1999 親子関係と独立性についての一考察—青年期における母子関係を中心に— 児童教育研究、8、95-101
- 岡田 努 1993 自我同一性早期完了地位についての一考察 新潟大学教育学部紀要、35(1)、57-68
- 岡堂 哲雄 2002 家族心理学講義 金子書房
- 落合 良行・佐藤 有耕 1996 親子関係の変化から見た心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究、44、11-12
- 落合 良行・楠見 孝編 1998 生涯発達心理学4 自己への問い直し 金子書房
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究、31、292-302
- 亀口 憲治 1992 家族システムの心理学 北大路書房
- 河合 隼雄 1976 母性社会日本の病理 中央公論社
- Gehring, T., M. 1993 Family System Test (FAST) Manual Belts Verlag, Weinheim (八田 武志訳 1997 FAST (Family System Test) マニュアル ユニオンプレス)
- 中見 仁美 1999 Family System Test (FAST) による日本の家族構造の研究 臨床教育心理研究 Vol.25 No.183-92
- 中見 仁美 2003 Family System Test による日本の家族について—Gehring の評価基準による「親密さ」と設問内容の比較— 教育学科研究年報、29、15-21
- 中村 淳子・秋葉 英則 1992 青年期における家族機能認知について—自我同一性地位との関わりから— 大阪教育大学紀要 第IV部門 41、11-23
- 野末 武義 1991 発達過程の観点から見た家族システムの健康性—ある健康な家族の事例研究を通して— 家族心理学研究、5、159-172
- Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *J. Pers. Soc. Psychol.*, 3, 551-558.
- 武藤 清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究、27、178-187
- 高橋 哲 1988 家族サブシステムの機能—父親機能の考察 家族心理学研究、2、153-162
- 八田 武志編 2001 シンボル配置技法の理論と実際 ナカニシヤ出版
- 平石 賢二 2000 青年期後期の親子間コミュニケーションと対人意識、アイデンティティとの関連 家族心理学研究、14、41-59
- 渡辺 さちや 1989 家族機能と自我同一性地位の関わり—青年期の自立をめぐる— 家族心理学研究、3、(2)、85-95